

「スーダン共和国」

私たち日本人にとって、スーダンは物理的にも心理的にも遠い国である。アフリカのどこにあるかも知らない人がほとんどだろう。あるいは、「テロ支援国」「イスラム原理主義」「ダルフル紛争」等スーダンは危険な国というイメージも多い。

筆者は、調査研究のために二〇〇三年と〇八年の二回、渡航した。首都ハルツーム周辺は、安全で居心地がよく、欧米メディア経由で報道される「民族浄化を謀る凶暴な国家」の片りんもない。むしろ、アラブ・非アラブ、イスラム・非イスラムの区別なく融合した歴史が示すように、スーダンは異文化や異国人に寛容である。

スーダンではたくさんの人との出会いがあった。国益を超えてアフリ

スーダン

エジプトの南に隣接するアフリカ最大の国。面積は日本の約7倍、人口は約3千万人。19世紀にはエジプトに占領され、その占領地が英国によって植民地化され、1956年に独立。独立後も南北で半世紀に及ぶ内戦が続き、数百万という民衆が避難生活を余儀なくされた。近年石油産出に伴い、最貧国から脱出、目覚ましい経済発展を遂げ、現在は、西部ダルフル地方の紛争が国際問題となっている。

楽木 章子



らっきー・あきこ 1961年 岡山市生まれ。同志社大学卒、京都大学大学院博士課程修了。2003年から現職。総社市教育委員。専門はグループ・ダイナミクス。

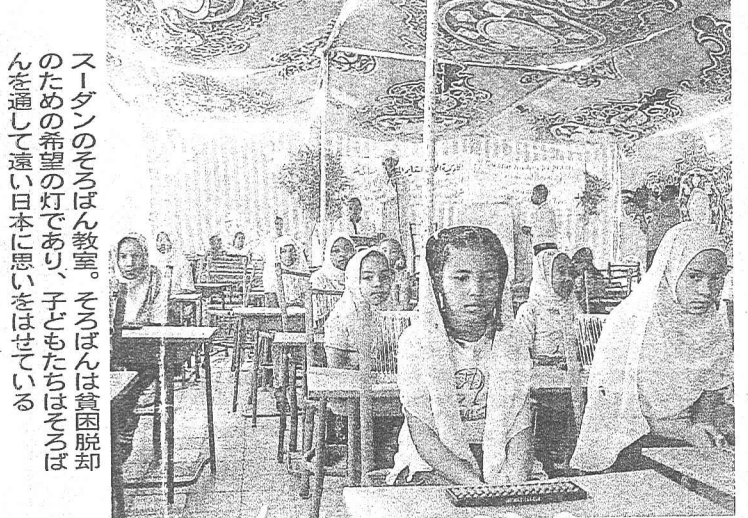
カ全体の平和を熱く語る エクトの団長を務めたのが、金政泰弘氏(加計学園相談役、元岡山大学学部長)。金政氏が最初にスーダンを訪れたのは一九八二年、当時のニメイティや井戸端会議に盛り上がる楽しい女性たち。どの場面を想起しても、暖かい気持ちがあがってくる。

や中東に流出しているシナ病院プロジェクトが立ち上がった。優秀な医師を国内に定着させるためには、高度な医学教育と設備を備えた総合病院建設が急務であった。金政氏は成田に帰国したその足で朋友の安倍晋太郎外相(当時)を訪問し、政府ルートの協力を依頼した。安倍外相は「岡大医学部が病院設立後もきちんとフォローするならば」という条件で、資金援助を約束した。その後、国際協力機構(JICA)も全面協力し、「イブ

スーダンに残る岡山の足跡

学問・研究のパイプ再び

ン敵視政策に追隨し、一九九〇年代以来スーダンとの政治的、経済的交流を絶っている。しかし、現在のスーダンには、かつて日本がさしのべた援助の跡を見ることができ、その最たるものは、教育機関を備えたハルツームの「イブシナ病院」。岡大医学部の主導のもとで設立された総合病院だ。今なおスーダンに根付くこの岡大医学部の貢献は、国際社会の中での「日本の誇り」であると同時に「岡山の誇り」でもある。



スーダンのそらばん教室。そらばんは貧困脱却のための希望の灯であり、子どもたちはそらばんを通して遠い日本に思いをはせている。



プロジェクトメンバーを直接知る人はいなかったが、当時のプロジェクトメンバーの名前と彼らの貢献が新しいスタッフにも語り継がれていた。日本から持ち込まれた各種機材は、一九八三年スーダン・日本の協力事業」という文字が刻まれていた。それらの機材は、かれこれ二十年以上前のものであるにもかかわらず、今なお現役で活躍中である。

より、現地医師への教育、最新医療技術の伝授などのソフト面に力を入れ、スーダン人が産み育てたイブシナ病院に對して、同じような思いを抱いていることだろう。概して、この種の援助は、高額の機材を寄付して終わることが多い。結局、現地では活用の場が乏しい。宝の持ち腐れになる場合が多々ある。金政氏率いるプロジェクトが実践した「スーダン人によるスーダン人のための医療」は、真の国際貢献、途上国援助のあるべき姿を教えてくれる。

(岡山県立大保健福祉学部専任講師)